

その存在そのものは永久不変のものである。そして日本においては、お互いに相争うために「立国の大法」が十分に表現されていない外国とは異なっており、天皇の名のもとに、神話の時代から変わらず「立国の大法」が十分に表現されていると述べられる。つまり、寛は「立国の大法」という概念を用いることで、法律や生活の秩序はすべて「立国の大法」の表現であるとしている。そして「立国の大法」が十分に表現されているのは、天皇が国を治め、国民が普遍的信仰として天皇を崇めているからとするのである。

寛の議論は神がかりとされ、当時においてはインテリには小馬鹿にされる議論であった。だが、寛はそれにもかかわらず帝国の全体性を包括的に「矛盾なく」説明しようとする。我々にはその説明体系はほとんど破綻していることは明白であるが、一方で寛の影響は大きな広がりを見せている。その秘密は「惟神の道」のもとに、生命や法というさまざまな全体性を、天皇の秩序の肯定にむすびつけて重ね合わせる論法にあるのではないだろうか。寛のような議論がどのような時代状況の中で話され、またどのような効果をもったのか。その内実に迫ることは、戦前における荒唐無稽で神秘的な政治思想がどのように説かれたのかを知るうえで、重要になるだろう。

前期西田哲学における「意識」の問題

秋富 克哉

西田幾多郎の処女作『善の研究』は、「純粹経験」を唯一の実在としてすべてを説明しようとする独創的な試みである。し

かし他方、そこに一貫して用いられている「意識」の語には、ある種の違和感を覚えることもまた事実である。と言うのも、「意識」は近代哲学の主観性の立場を特徴づけるものであり、主客の枠組みを超える立場を開こうとする姿勢とは相容れないように思われるからである。にもかかわらず「意識」の語を用いざるを得なかった背景には、同時代的な哲学潮流のうちになお強く働いた近代哲学の主観性の立場、さらには独自の歩みを進めつつあった心理学の立場を受け止めたうえで、自らの議論を展開しなければならぬという事情があった。このような状況下、意識理解の深まりは実在理解の深まりと相俟って、続く『自覚に於ける直観と反省』から『意識の問題』、さらに『芸術と道德』を経て、やがて意識の「場所」的性格の確立にまで繋がっていった。

ところで、『善の研究』における意識理解の特色は、思惟、意志、知的直観という順に、純粹経験の深まりが認められること、また「知情意」という表現を用いながら、「情」の独自性を取り出されていないことである。さらに問題点として、意志と知的直観に優位を置く立場は、却って思惟の位置づけの低さを際立たせる。『善の研究』を成り立たせる哲学的知は、知よりも情意が深いことを理解し説明する知であるはずである。この高次の知の位置づけが明らかにされていないところに、本書の問題点が残っている。

この課題に対し、『自覚に於ける直観と反省』は、一方で主客未分の純粹経験を「直観」と受け止め直し、他方で高次の思惟の立場を「反省」と捉え、両者を繋ぐものを「自覚」と位置

づけた。「我は我である」と定式化される自覚には、「我は我である」という自己復帰の反省と、それが我であるという自己発展、つまり「我あり」の直観が一つに結び付いている。本書で注目したのは、最後に真実在として出されてくる「絶対自由の意志」である。これは、自己否定の復帰を反省、自己肯定の発展を直観として、両者の否定即肯定の「即」に立つものである。この意志は「自覚的体系の背後」とされるがゆえに、直観と反省を結びつける自覚の背後として、最も深いものと見なされ得るであろう。

しかし、後に「場所」の立場が成立した時に西田は、この書を顧みて、意志の根底に直観を考えていたと語る。すなわち、絶対自由の意志自体が、既に直観を根底に持つものとして受け止め直されるのである。回顧の言葉を前提して以前の著作を検討することは、方法的に問題があるが、少なくとも当時の西田が、意識現象としての思惟、意志、直観をめぐる、ある複雑な事態のうちを動いていたことは十分に確認できる。『自覚に於ける直観と反省』後の『意識の問題』と『芸術と道徳』は、そのことを示すものとして、従来あまり注意されていないが、貴重な書物である。いずれも、「絶対自由の意志」の立場を究極とする前提のもと、前者では、心理学の議論を踏まえつつ、特に「感情」の独自性を取り出す姿勢が顕著となり、後者では、「芸術と道徳」という枠組みのもと、「感情と意志」あるいは「美と善」をめぐる、さらに哲学知の「真」との関係を含め、真善美あるいは知情意の全体に考察が広がっている。芸術と道徳をとともに純粹意志の対象界に属するものと受け止める立

場は、全体としてやや図式的な性格を否めないが、他方で、芸術と道徳と哲学を超えるもの、つまり宗教への眼差しが、意志の根底に改めて直観を認める姿勢となつて垣間見られる。このような展開には、真実在に対する一貫した探究のなか、哲学および関連諸学の知見を積極的に受け止めながら、主題領域の拡がりや深まりに応じて意識の立場そのものを絶えず捉え返していかうとする西田の姿が認められるように思われる。

西田幾多郎「場所」論の宗教的意義

杉本 耕一

中期西田哲学に属する論文「場所」(大正一五年発表)において確立された「場所」の論理は、後期思想においても継承され、西田は生涯にわたって、自身の哲学を「場所」の哲学として論じてゆく。後期西田哲学の核心をなす「世界」の思想は、中期「場所」論以来の発想を継承すると同時に、「行為」の世界としての現実の世界の動性を射程に含むことによってその内実を一新させた「場所」論の意味をもつものとして理解することができる。西田はさらに、最後の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」(昭和二年発表)になると、この「場所」の論理によって「宗教」の問題を正面から論ずる。「宗教は、哲学的には唯、場所的論理によつてのみ把握せられるのである」[1/425]と云うのが、そこでの西田の立場であった。

西田の「場所」論、あるいは「世界」論というのはもともと、实在の論理的構造をあくまでも「哲学」的にとらえようとして企図された思想であった。我々がそこにおいて生きている